

徳之島天城町松原と浅間の方言の名詞アクセント体系：単語声調方言の例として

早田, 輝洋

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

132

(終了ページ / End Page)

144

(発行年 / Year)

1995-02-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012659>

<追悼論文>

徳之島天城町松原と浅間の方言の名詞アクセント体系

——単語声調方言の例として——

早 田 輝 洋

0. はじめに

現在、日本語方言アクセント分析で、筆者が関心を持ちながら、すっかりしていないものに少なくとも次の二つが有る。一つは鹿児島大学の崎村弘文氏の一連の奄美沖縄方言アクセントの研究である。筆者は氏の努力に敬意を表するし、筆者の或る見通しを受容れてくれて研究を続けられた結論は基本的に正しいと思うものの、その呈示法に問題があり、学界でどうもすんなり受け入れられていない、学会で氏の発表を聞いても、氏の論文を読んでも、そのままでは納得できない。その一つ、奄美の徳之島天城町の松原方言のアクセントを筆者なりに検証して見たいと思う。もう一つは、同じく徳之島天城町の浅間方言のアクセントである。松原町と浅間町とは数キロメートルしか離れていないが、同じとは言えない。この方言アクセントについては最初柴田武氏による詳細な研究（1960）が発表され、ついで上野善道氏（1977）がそれを一層完全に調査して発表された。この方言アクセントに関して、筆者が柴田論文をもとにちょっとした注として、或解釈（分析）の可能性を示したが（早田1977, p.358）、それが上野論文の解釈と大いに違い、上野氏は上記論文に続いて発表するつもりであったものを保留したまま今に至っていると氏自身の口から聞いた。該方言に関する上野氏の多くの調査資料と氏の解釈を期待していた筆者としては全く残念なことであり、また発表保留の原因が筆者の不完全な可能性の示唆である以上、筆者なりの解釈を全面的に開陳する義務を感じながら、今までつい忙しさにまかけて、そのままにしていた。今回この機会に不十分ながら、筆者の解釈を発表しようと思う次第である。

琉球諸方言のアクセントに関して琉球大学の上村幸雄氏は、最近いわば、アクセント分析を放棄してリズム分析にのみ集中している感があるほど、琉球諸方言は（上代日本語には少なくとも表記上見られない）母音の長短の区別の豊かな方言である。ポリワノーフの言（1927?）にもかかわらず、琉球方言は（音節の他に）モーラの有意味な方言と言うべきであろう。

1. 松原方言

鹿児島県大島郡天城町の松原と浅間の方言のアクセント体系について考える。崎村弘文氏の徳之島松原方言のアクセントに関する研究は1982年の方言研究会で知ったが、今回はそれを改訂した『鹿児島大学文科報告』の資料（1982）を元にした。

この方言の自立語は必ず一個は長音節を含まなければいけないようである。リズムはともかく、それだけに音節構造が重要であろうと想像される。ただ、氏の研究では、次のような問題がある。共時論の研究に初めから通時論が混じっていること。結論としてシラビーム単位の3型といいながら、ピッチ形をすべてモーラ単位で並べているので、そのままでは音節との関係がまるきり分らないこと——例えば、○○●と書かれたピッチ形には（○は低ピッチモーラ、●は高ピッチモーラ）、2モーラで低ピッチの第1音節に1モーラで高ピッチの第二音節が続いた形も、1モーラで低ピッチの第1音節に2モーラで上昇調の第2音節が続いた形も区別無く盛込まれてしまう。したがって、音節構造とピッチ形との関係が皆目分らない。すなわち長音節と短音節の配置に関して全然配慮していない。また、はじめモーラばかりで例を出し、後にシラビームという時になると、今度はモーラをいっさい顧みず音節数ばかりを問題にする。したがって、ピッチ付与の規則に音節構造が出てこず、うまく行かなくなる。

以下、資料はすべて崎村（1982）により筆者の分析を試みてみる。分節音は簡略化して示す。大文字の子音は喉頭化音、母音Iは中舌母音である。短い音節（1モーラ音節）をoで、長い音節（2モーラ音節）を○で示すことがある。ピッチの音声表記として、上野善道氏に倣い、「をピッチが「高」に変る所（全高の初めにもこの記号を付した）、ㄣをピッチが「低」に変る所、『を次の音節（記号の右の1音節）が「上昇調」である所、ㄣを直前の音節（記号の左の1音節）が「下降調」である所を示すために用いる。なお崎村氏は1音節の後半のみの上昇調のような記号も用いているが、その情報も省略しない為に、次の記号を併せ用いる。即ち、H（2モーラの高）、L（2モーラの低）、R（2モーラの上昇）、F（2モーラの下降）、h（1モーラの高）、l（1モーラの低）、r（1モーラの上昇）、f（1モーラの下降）とする——fは実在しない。

まず崎村氏の資料を音節構造別に分類整理した。―（高平調）、／（上昇調）、＼（下降調）が筆者の結論の簡略記号である。

本方言のアクセント体系を（1）のような3種類の単語声調と認める点では、筆者は崎村氏と同じであるが、実は、各類への単語の共時的な所属が氏と筆者とでは著しく違う点に注意する必要がある。例えば氏には「●○○・●●●・○○●は、妙義抄式アクセントとの対応および近畿諸方言アクセントとの対応を手がかりに【中略】同一の調類に属させる」（p.7）、「○●○・○○●○は、いずれも【中略】特殊な調値のようで、所属語の多さにも関わらず、安定した一類を成すかどうか甚だ疑問である。したがって、上表にはこれを含めない」（p.7）等の如き通時論の混入が多く、それが恣意的な分類と多くの資料の抛棄を将来し、共時的分析のすべてを残念ながらぶち壊しにしている。結果として、筆者の「高平調」を二分して一部を筆者の「下降調」に入れている。氏が筆者の―（高平調）を「昇

調、／（上昇調）を「低」調、＼（下降調）を「高」調としているのも、単なる名称の違いではなく、型の分類の根本精神が違うからである。筆者としては、皮肉なことながら、調査者崎村氏自身が捨てた語例も含め氏の発表したすべての調査例を考察の対象にして再分析せざるをえなかったわけである。

(1)

	I	II	III	IV	
{	a	—○	—○○	—○○○	—○○○○
	b	／○	／○○	／○○○	／○○○○
	c	＼○	＼○○	＼○○○	＼○○○○

以下(2)は、崎村氏の資料から得られたピッチ形を筆者の仮定した3種の単語声調別に並べたものである。各型の代表的な語例を原則として1例ずつ挙げた。右から3欄目の数字は、その型の語例の数である。(h)(l)は助詞のピッチ形を示す。

(2)

{	1 音節	—	{	↑○	H(h)	11	naa	名
				↑○	R(h)	4*	kui	声
		／	{	○↑	lr-L(h)	10	ʔii	絵
				↑○~○↑	R-L(h)	1*	hai	針
	＼	○↓	F(l)	6	ʔuN	海		
{	2 音節	—	{	↑○o	Hh(h)	10	ʔiiki	息
				o↑○	lH(h)	42	hanaa	鼻
				↑○○	HH(h)	3	wIlmun	老人
		／	{	○↑o	Lh(h)	19	maaci	松
				o↑○	lR(h)	2*	hasaN鋏、wunan牝牛	
				o○↑	llr-lL(h)	41	hanaa	花
			○↑○	LH(h)	3	ingaa	男	
		＼	{	○↓o	Fl(l)	6	KjuubI	帯
			↑○↓o	Rl(l)	3*	juuki	斧	
			o↑○↓	lF(l)	7	ʔicjuu	糸	
			○↑○↓	lF(l)	9	ciQkjuu	月	

3 音節	—	┌ ○	Hhh (h)	4	huuisi	岩
		└ ○	hHh (h)	1*	nigiiri	右
		o└ ○	lHh (h)	8	kataaci	形
	/	○└	Lhh (h)	1	guuzira	鯨
		o└	lLh (h)	9	cubaaki	椿
		oo└	lHh (h)	7	² inucii	命
	\	oo└	lH (l)	2	wutugEE	顎、kaziraa 蔓

語例の数の欄の*は、同一の単語声調と考えられるのに、同じ音節構造でありながら複数個のピッチ形の現れている箇所を示している。単語声調と音節構造が与えられれば一定のピッチ形が予測される、という前提である。*の付いているようなものは都合が悪いから「上表にはこれを含めない」とする訳にはいかない。

まず、1音節高平調 $\bar{\text{○}}$ に「 └○ H(h)と『 ○ R(h)が有る所である。『 ○ は11例中2例のみ Vi 二重母音であるが、『 ○ は5例中4例が Vi 二重母音である。崎村氏も既に注意している所であるが、Vi 二重母音の時に語頭が低く実現しやすい——低く聞えやすい——のであろう。1音節上昇調 /○ は10例が ○└ lr-L(h) であるのに1例のみ

『 $\text{○} \sim \text{○└}$ R-L(h) である。しかし、これは音声的に非常に近いものであり、11例すべて助詞は高く付き、その時の名詞自体は低、助詞が付かなければ10例が、前半低、後半上昇であり、1例が上昇調というのであるから、いわば誤差のうちに入る程度であろう。その1例のピッチ形 /○ は、名詞単独の時のみ $\bar{\text{○}}$ と或いは中和するかもしれないが、助詞が付いた時には明らかに違うのであるから問題ではない。東京方言の「花」と「鼻」単独時のピッチ形に似ている現象かもしれない。2音節上昇調 /o○ が41例 o○└ llr-lL(h) で2例 o└○ というのも全く同じことである。2音節下降調 \textbackslash○o が6例 ○└o Fl(l) で3例 『 $\text{○} \text{└o}$ Rl(l) というのは上と事情が違う。6例では後ろから3モーラ目 antepenultima が、3例では後ろから2モーラ目 penultima が「高」であるが、前者は6例中5例が喉頭化音で始っており、後者は喉頭化音で始っているものは一つもない。喉頭化音で始めるとピッチが高く始りやすいことは、朝鮮語諸方言にも見られることであり、不思議なことではない。喉頭化により、高いモーラが1モーラ前にずれたのであろう。3音節高平調 $\bar{\text{o○o}}$ で8例が o└○o lHh(h) に対し1例のみ └o○o hHh(h) である。この例も前の前の例と同様であろう。これだけ長い単語で対立する形のない範囲で短い第1モーラのみ的高低は問題にならないことであろう。

以上のような考えの下に、単語声調と音節構造から概略のピッチ形を予測する規則を考えてみよう。

まず、この方言のこの資料の限りでは、助詞の有無にかかわらずなく、名詞のピッチ形が定まり、詳細は分らないが、助詞は名詞の最終ピッチに従うようである点、鹿児島市方言のような音韻句単位のものでなく、名詞単位のものと考えられる。3種の単語声調の各メロディーは、高平調 (―) がH、上昇調 (／) がLH、下降調 (＼) がHL (或いは LHLとすべきか) であろう。自立分節的な表記のほうが宜しいかもしれないが、敢えて略式に或いは多少古典的に表す。

(3) 松原名詞ピッチ付与規則

(Sは音節、 \bar{S} は長音節、 \bar{S} は短音節、 2S は喉頭化音で始る音節)

―	a	(\bar{S}) S_1	→	[(L)H ₁]	／	#_
／	b	MMM ₀	→	[LLH ₀]	／	#_
＼	c1	M ₀ MM	→	[L ₀ HL]	／	_#
	(c2)	$^2\bar{S}$ M	→	[FL]	／	#_#

これを散文で表せば以下のようになる。

- a 高平調 (―) 名詞につき、語頭の短音節を (それが有れば) 「低」にし、他はすべて高にせよ。
- b 上昇調 (／) 名詞につき、語頭の2モーラを「低」にし、他のモーラを (それが有れば) すべて「高」にせよ。
- c1 下降調 (＼) 名詞につき、語末2モーラを「高低」にし、それより前のモーラを (それが有れば) すべて「低」にせよ。
- (c2 2音節の下降調 (＼) 名詞につき、第1音節が喉頭化音で始る長音節で第2音節が短音節の時は、第1音節を「下降調」、第2音節を「低」にせよ。)

規則c2は妙に射程の狭い規則でやや怪しいが、資料が多数得られれば更に一般性のある規則に改められるであろう。

以上に見るように、本方言は3種の単語声調を認めれば音節構造からピッチ形が得られる単語声調アクセントであると言える。通時的な考慮を共時論に持込む必要もなければ、もろもろの語例を不適切な形として退ける必要もない。

2. 浅間方言

松原からあまり隔っていない西海岸よりの浅間の方言である。資料は全面的に上野(1977)によっている。氏の解釈は(4)の通りである。*の付いた形(4音節b0型)は実在しない——見つからない——という。氏のこの分析によれば、この方言は音節単位ではあるが、高く始る単語声調‘a’(上野氏の高起「式」と低く始る単語声調‘b’(同じ

く低起式) およびピッチの変り目(高起式の場合は下がり目し、低起式の場合は上がり目 Γ)の位置が問題になる狭義のアクセント方言で、まず京阪方言的アクセントと解釈されているのであろうが、ピッチの変り目が高起式ならば下がり目、低起式ならば上がり目、という京都方言よりよほどおかしなものになる。このようなピッチの変り目は——マーチン氏が妙義抄アクセントについて考えているようであるが——筆者としては現在の現実の言語・方言で見たことがないし、信じられない。また崎村氏と同じく、音節構造に対しては一顧だにしていな。筆者がかつてこれを見て多少分析を試みてみたところ、どう見ても名詞は2型単語声調としか思えない——必ずしも筆者は琉球方言のすべてが単語声調方言であると決めてかかっている訳ではない——そして、実際に名詞について、もちろん氏の挙げられた資料の範囲内であるが、整理してみると(4)に出ているすべての型は出てこないのである。氏が*印を付した型の他、筆者が \times 印を付した4音節 a1 と b1 の型も、筆者の見限り、名詞には出てこない。氏は、名詞も動詞も形容詞も全部混みにしている。この三つの類がすべてアクセント上同じ振舞いをするのであればよいのであるが、氏の体系表にはこのように名詞には出てこない型も含まれている。一般に異なる体系・構造を有するものを複数種類混みにして全体の構造を考察しても有意義な結果は得られない。せいぜい最もつまらない最大公約数といった共通点が拾い出されるだけである。上野氏は、該方言の名詞なら名詞というような1範疇に注目すると、それなりの整然たる体系が現れ、全範疇を混みにすると整然としたものが出なくても、全範疇を問題にすべきだ、との信念を持っているようである(かつて筆者が朝鮮語晉州方言のアクセントについて、これも名詞と動詞を混みにしないで名詞だけを取上げれば整然たる体系が得られるとの小論(Hayata 1978)を発表した時に述べていらしたと記憶する)。これも信念——或いは好み——の問題だから仕方のないようなものの、何とも残念な気がするとしか言いようがない。

(4)	I	II	III	IV	
{	a0	$\Gamma\bigcirc$	$\Gamma\bigcirc\bigcirc$	$\Gamma\bigcirc\bigcirc\bigcirc$	$\Gamma\bigcirc\bigcirc\bigcirc\bigcirc$
	b0	$\vee\bigcirc$	$LO\vee\bigcirc$	$LOO\vee\bigcirc$	* $LOO\bigcirc\vee\bigcirc$
{	a1		$\Gamma\bigcirc LO$	$\Gamma\bigcirc LOO$	$\times\Gamma\bigcirc LOO\bigcirc$
	b1		$LO\Gamma\bigcirc$	$LO\Gamma\bigcirc LO$	$\times LO\Gamma\bigcirc LOO$
{	a2		$\Gamma\bigcirc\bigcirc LO$	$\Gamma\bigcirc\bigcirc LOO$	
	b2		$LOO\Gamma\bigcirc$	$LOO\Gamma\bigcirc LO$	
{	a3			$\Gamma\bigcirc\bigcirc\bigcirc LO$	
	b3			$LOO\bigcirc\Gamma\bigcirc$	

筆者としては、(4)の体系は、まず名詞に限れば(動詞については活用表が完備していないと何とも言えない)、(5)のように非常にあっさりした2型単語声調体系に過ぎないということである。これは(1)とよく似ているが、それ以上に型の数の少ない体系である。

(5) 浅間方言の名詞のアクセント体系

	I	II	III	IV	
{	a	—○	—○○	—○○○	—○○○○
	b	/○	/○○	/○○○	/○○○○

ここでまた松原の時のように資料を——名詞に限って——音節数と筆者の仮定した単語声調別に並べてみよう。松原と同様、喉頭化子音は大文字、iの中舌母音はI、eの中舌母音はEで表す。

(6)

1音節	{	—	Γ○ H	62	KII 毛、tui 鳥、 ² UN 海	
		/	Γ'○ R	55	kui 声、Kin 衣 (<きぬ)	
2音節	{	—	Γ _o ○	hH	149	hanaa 鼻
			Γ○○	HH	5	² wIImUN 翁 (<老い者)
			Γ○Γ○	HL	1*	² oobai 蠅 (<青蠅)
			Γ○Γ _o	HI	52	² uubi 帯
	{	/	oΓ'○	IR	150	hanaa 花
			○Γ'○	LR	23	KUNmaa 車
			○Γ○	LH	1*	² oQkaN 母 (<新形)
			○Γ _o	Lh	52	sjaaru 猿
3音節	{	—	Γ○○○	HhH	5	CjIragin 単衣
			Γoo○	hhH	2	haclkaa 二十日、huclkaa 二日
			Γ○○Γ _o	hHI	33	clkjaara 蛙
			Γ○○○Γ _o	HHI	1	² eetaara 蛙(昔人は ² jEEtaara)
			Γ○○oo	HI	7	² aakuta 屑 (<芥)
			Γ○○○Γ○	hHL	2	sInaamUN 品、sjamIIsjIN 三味線

	{	oo ^ʔ ○	llR	31	hasjamii 鉄
		o○ ^ʔ o	llh	31	kutuuba 言葉
/	{	○ ^ʔ ○ ^ʔ o	llh	3	manguuhu 蜘蛛、dEEkuunI 燕 (<大根根)
		○ ^ʔ ○	lIH	4	bindarEE 盥 (<顔盥)
		○ ^ʔ ○ ^ʔ ○	llH	1	miQkunzjII 盲 (<目クズレ)
l	l	○ ^ʔ o ^ʔ o	Lhl	2	huikirI 切通し (<堀切)、'jaazIba 八重歯
	{	^ʔ ○ ^ʔ o o○	HhhH	1	kwaa'jamagwaa 小山
		^ʔ ○ ^ʔ o○ ^ʔ o	HhHl	1	'inganuQkwa 息子 (<男の子)
	l	^ʔ o○ ^ʔ oo	hHll	4	kaduugucI 門 (カド) (<門口)
4 音節	{	ooo ^ʔ ○	lllH	6	ʔa'oʔiruu 青、緑 (<青色)
		oo○ ^ʔ o	llLh	4	sItumIItI 早朝 (<ツトメテ)
/	{	○ ^ʔ ○ ^ʔ ○ ^ʔ o	LIHl	4	dEEguruuma 独楽
		o○ ^ʔ o ^ʔ o	lLhl	2	CInaagira 蜥蜴、ʔumEQkirI 思いきり
l	l	o○ ^ʔ ○ ^ʔ ○ ^ʔ ○	lLHL	1	karaazInkII 髪 (<頭の毛)
5 音節	{	ooo ^ʔ ○ ^ʔ o	lllHl	5	matagaraasI 燕 (<股鳥)
	/	oo○ ^ʔ o ^ʔ o	llLhl	1	gumiʔaakuta 屑 (<ごみ芥)
	/	○oo ^ʔ ○ ^ʔ o ^ʔ o	LIlHl	1	ciQkjuganaasI お月様 (月は ci ^ʔ kii)
l	/	oo○ ^ʔ ○ ^ʔ o ^ʔ o	llLHl	1	'wara'waicIcI 大型の槌 (槌は CI ^ʔ cI)
6 音節	/	oooo ^ʔ ○ ^ʔ ○	llllHH	1	haraclikikjoodEE 従兄弟

同じく単語声調と音節構造だけではピッチ形の予測のつかない例には語例数の数字に*を付したが、見るとおり僅かに二つしかなかった。

2音節高平調 ^ʔ○○ のピッチ形は、5例が ^ʔ○○ HH で、1例のみ ^ʔ○^ʔ○ HL である。前者5例の語彙は VN で終るもの4例、a: で終るもの1例。後者の1例は ʔoobai (青蠅) で Vi で終わっている点が違うが有意味かどうか怪しい。ʔooba'i と (臨時に——言い間違えて——でも) 3音節で発音したとしたら予想されるピッチ形である。なお「青蠅」は松原では ^ʔ○○ である (崎村氏資料) ——この形なら、めでたしめでたしであるが。もう一つの*は、2音節上昇調 /○○ で、23例が ○^ʔ○ LR で、1例が ○^ʔ○。この例外的1例は、ʔoQkaN (母) で新形という。問題は新形というより、VN 終りかもしれない。23例の単語のうち VN 終りは僅か1例で、Vi 二重母音終り3例、他

は19例すべて長母音終りである。5音節以上の単語は極度に例が乏しいが、一応、2種の単語声調と音節構造からピッチ形を予測する規則を仮定してみよう。

単語声調別に(6)を見れば、まず高平調(—)は、語末短音節(連続)が(あれば)「低」、他は「高」ということになる。これを(7)の規則a1で表す。他にa2が心要である。上昇調(/)はそれほど単純ではない。見た所、短い単語では語末上昇で——非常に短い時は語末音節「上昇」、少し長くなると語末音節「高」——長くなると語末下降が加わる。そこで環境を分けて一度にメロディーを付与する形にせず、最初に「上昇」を与え、長くなるに従い徐々に修正する形の規則にしたのが(7)のb1-b4である。

(7) 浅間名詞ピッチ付与規則 (ordered)

S は音節、 \bar{S} は長音節、 \check{S} は短音節、M はモーラ

—	a1	$M_1\check{S}_0$	→	$[H_1L_0]$	/	__#
	a2	$M_1\bar{S}\bar{S}$	→	$[H_1HL]$	/	__#
/	b1	M_1M	→	$[L_1H]$	/	__#
	b2	S	→	[H]	} /	$M_3_ \#$
	b3	SS	→	[HL]		
	b4	$\check{S}\check{S}$	→	[HL]	/	__#

以上を散文で表せば以下のようなになる。

- a1 高平調(—)の単語は、語末に短音節(連続)があればそれをすべて「低」にし、それより左すべてを「高」にせよ。
- a2 3音節以上の単語の語末の2長音節連続は「高低」、それより左は「高」にせよ。
- b1 上昇調(/)の単語は、語末1モーラのみ「高」にし、他はすべて「低」にせよ。
- b2 語末の1音節は、それより左に3モーラ以上あれば、「高」にせよ。
- b3 語末の2音節は、それより左に3モーラ以上あれば、「高低」にせよ。
- b4 語末の2短音節連続は「高低」にせよ。

以上のピッチ付与の派生過程を(8)に示す

(8)

—○	→(a1)	↑○	H
/○	→(b1)	↑○	R
— _o ○	→(a1)	↑ _o ○	hH

$\overline{\circ}\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\circ$ HH 52例 ($\Gamma\circ\overline{\circ}$ HL 2oobai 1例)
 $\overline{\circ}\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\overline{\circ}$ Hl

$\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ^{\Gamma}\circ$ 1R
 $\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ^{\Gamma}\circ$ LR 23例 ($\circ\Gamma\circ$ LH 2oQkan 1例)
 $\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ\Gamma\circ$ Lh

$\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\circ\circ$ HhH
 $\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\circ\circ$ hhH
 $\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\circ\overline{\circ}$ hHl
 $\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\circ\overline{\circ}$ HHl
 $\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\overline{\circ}\circ$ Hll
 $\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\circ\circ$ → (a2) $\Gamma\circ\circ\overline{\circ}$ hHL

$\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ^{\Gamma}\circ$ llR
 $\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\Gamma\circ$ llh
 $\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\Gamma\circ$ LLh
 $\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ^{\Gamma}\circ$ → (b2) $\circ\circ^{\Gamma}\circ$ lIH
 $\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ^{\Gamma}\circ$ → (b2) $\circ\circ\Gamma\circ$ LLH
 $\diagup\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ^{\Gamma}\circ$ → (b2) $\circ\circ^{\Gamma}\circ$ → (b4) $\circ\circ\Gamma\circ$ Lhl

$\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\circ\circ$ HhhH
 $\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\circ\overline{\circ}$ HhhHl
 $\overline{\circ}\circ\circ$ → (a1) $\Gamma\circ\overline{\circ}\circ$ hHll

$\diagup\circ\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\circ^{\Gamma}\circ$ → (b2) $\circ\circ\circ\Gamma\circ$ llIH
 $\diagup\circ\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\circ\Gamma\circ$ (→ (b2) $\circ\circ\circ\Gamma\circ$) llLh
 $\diagup\circ\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\circ\Gamma\circ$ (→ (b2) $\circ\circ\circ\Gamma\circ$) → (b3) $\circ\circ^{\Gamma}\circ\overline{\circ}$ lIHl
 $\diagup\circ\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\circ^{\Gamma}\circ$ (→ (b2) $\circ\circ\circ^{\Gamma}\circ$) → (b3) $\circ\circ\Gamma\circ\overline{\circ}$ llLh

$\diagup\circ\circ\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\circ\circ^{\Gamma}\circ$ → (b2) $\circ\circ\circ\circ\Gamma\circ$ → (b3) $\circ\circ\circ\circ\Gamma\circ\overline{\circ}$ llLHL

$\diagup\circ\circ\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\circ\circ\Gamma\circ$ (→ (b2) $\circ\circ\circ\circ\Gamma\circ$) → (b3) $\circ\circ\circ\circ^{\Gamma}\circ\overline{\circ}$ llIHl
 $\diagup\circ\circ\circ\circ$ → (b1) $\circ\circ\circ\circ^{\Gamma}\circ$ (→ (b2) $\circ\circ\circ\circ^{\Gamma}\circ$) → (b3) $\circ\circ\circ\circ\Gamma\circ\overline{\circ}$ llLhl

$\diagup \bigcirc \bigcirc \bigcirc \bigcirc \rightarrow (b1) \bigcirc \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \rightarrow (b2) \bigcirc \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \rightarrow (b3) \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \uparrow \bigcirc \quad \text{LIIIH}$
 $\diagup \bigcirc \bigcirc \bigcirc \bigcirc \rightarrow (b1) \bigcirc \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \rightarrow (b2) \bigcirc \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \rightarrow (b3) \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \uparrow \bigcirc \quad \text{IIIIH}$

$\diagup \bigcirc \bigcirc \bigcirc \bigcirc \rightarrow (b1) \bigcirc \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \rightarrow (b2) \bigcirc \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \rightarrow (b3) \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \uparrow \bigcirc$
 (しかし実際の資料は $\bigcirc \bigcirc \bigcirc \uparrow \bigcirc \bigcirc \quad \text{IIIIH haracIkikjoodEE}$ <従兄弟>1例のみ)

仮定したピッチ付与規則(7)でまかなえない例は、²oobai <青蠅>、²oQkan <母>、haracIkikjoodEE <従兄弟>の3例であった。

規則(7)は、先にアクセント記号を指定し、それに対してメロディー付与規則を適用すべきものであろうが、高平調と上昇調とが平行でなく、現在の筆者には綺麗に記述できないので、不格好ながら、そのままにしておく。また上野氏の(4)の表記形は、名詞に関して(9)の順序付けられた規則で得ることができる。

(9) 高平調(□)を語頭の「、上昇調(/)を語頭のしとする。

Sは音節、 \bar{S} は長音節、 \check{S} は短音節、Mはモーラ

— a1 $\bar{S} \rightarrow \bar{S} \uparrow$ / $\left\{ \begin{array}{l} S _ \bar{S} \\ _ \check{S}_0 \end{array} \right\} \#$

/ b1 $S \rightarrow \uparrow S$ / $_ \#$

b2 $\check{S} \check{S} \rightarrow \uparrow \check{S} \check{S}$ / $_ \#$

b3 $S \uparrow S \rightarrow \uparrow S \uparrow S$ / $M_3 _ \#$

b4 $\uparrow \bar{S} \rightarrow \uparrow \bar{S}$ / $M^2 _ \#$

以上を散文で表せば以下のようなになる。

- a1 高平調(□)の3音節以上の単語は、語末に長音節が二つあれば、最終音節を「低」にし、それより左の音節をすべて「高」にせよ。
- a2 高平調単語の語末短音節連続をすべて「低」にし、それより左の音節をすべて「高」にせよ。
- b1 上昇調(/)の単語は、語末音節を「高」にし、それより左の音節をすべて「低」にせよ。
- b2 上昇調単語の語末2短音節連続を「高低」にし、それより左の音節をすべて「低」にせよ。
- b3 上昇調単語の語末2音節よりさらに左に3モーラ以上あれば、語末2音節を「高

低」にし、それより左の音節をすべて「低」にせよ。

- b4 上昇調単語の語末長音節よりさらに左に2モーラ以下しかなければ、語末長音節を「昇」にし、それより左の音節をすべて「低」にせよ。

(7) なり (9) なりの如き規則を不完全ながら一応立てた上で、それでまかなえない語例や規則そのものの不自然な所を重点的に再調査し再考する、ということが大切だと考える。

3. おわりに

松原の規則(3)は、それでも、かなりもっともらしいものであるが、浅間の規則(7)は、もっとすっきりしたものが望ましい。それでも松原はもとより、浅間の名詞アクセントの体系も単語声調であると筆者は思っている。先学の調査資料を見ると、まだ奄美琉球の諸方言のアクセント体系もそれだけからは単語声調方言でないようなものも見られるのであるが、長い単語の資料も豊富に蒐集し分析しなければ何とも言えない感じである。

共時的な分析を施して後、方言の比較や通時的分析に進むべきである。寧ろ通時的なものに共時論に持込むとかえって分析がうまく行かなくなることに注意しなければならない。同時に厳しい仮説をもって資料を蒐集整理すると、一層資料の大切な点も得られると考えられる。今回は特に崎村・上野両氏の批判を期待している。

畏友中本正智氏は、かつて、現地調査の億劫な筆者を引っぱり出して沖縄本島の諸処を案内してくださった。首里で二泊三日を共に飲み明したが、この次は氏に付いて現地調査を試みようとして期待していながら、相変わらずの怠惰な筆者はその機会を得ないで便便と日を送っているうちに、かくも早々と幽明処を隔ててしまおうとは夢にも思わなかった。中本正智氏は筆者にもっと沖縄方言を研究するようにとのことだった。生前に氏のご期待に添えなかったことは痛恨の極みである。拙い論考を、幸いに比嘉実氏の懇意により中本正智博士追悼号に載せる機会を得た。中本正智博士の冥福を祈るとともに比嘉氏に感謝申上げる。

引用文献

- 早田輝洋 1977. 生成アクセント論、『岩波講座 日本語 5—音韻—』岩波書店。
 Hayata, Teruhiro 1978. The Accentual System of the Jinju Dialect of Korean, *Studies in Literature No. 4/ Bulletin of the Faculty of Literature/ Kyushu University*, No.15. pp. 29-34.
 Polivanov, E. D. 1927? *Kratkaja fonetika japonskogo jazyka*. V. M. Alpatov: Iz nasledija. E. D. Polivanova. <<Voprosy Jazykoznanija>> No.4. 1991. C. 124-137.
 崎村弘文 1982. 「徳之島の方言(2)——天城町松原方言の実態——」『鹿児島大学文科報

告 第十八号 第一分冊』 pp. 1-26.

柴田 武 1960. 「徳之島方言の音韻」『国語学』 41. pp. 14-27. 『沖縄文化論叢』 第5巻 平凡社1972に再録.

上野善道 1977. 「徳之島浅間方言のアクセント (1)」『小松代融一教授退職嶋稔教授退官記念 国語学論集』 pp.220-181(1-31).



小湾調査委員会議風景